

教科書（チョルスとヨンヒ）について

オ・ソクン：作者のことば

（翻訳 清家由衣）

韓国の教科書には、子どもたちを教育するための教訓的なイメージが溢れている。だが現実には、なんらかの理由で、私たちの子ども時代には、奇妙で衝撃的なイメージが満ちているものだ。そうしたイメージは、どういうわけか私たちの日々の生活にときどき現れては、その後の人生に影響を及ぼしてゆく。そういう、子どもの頃からの奇妙な記憶を持つ人たちと、写真家である私は、小学校の教科書の主要な登場人物であるチョルスとヨンヒの人形のマスクを被り、かつて感情を揺さぶった瞬間を再創造しようとした。1970年代初めから1990年代半ばにかけて小学校へ通っていた、若い韓国人たちの記憶に残る教科書の中に、これらの感情を揺らす瞬間はひとつずつ造り直されたのだった。

小学校の教科書にみられるチョルスとヨンヒの物語は、幼少期の思い出にまつわるものだが、これまでの人生に大きな影響をもたらしてきた。なぜ私たちはこうした記憶に影響を受け続けるのか、その本質は何なのか、根底にある原因は何なのか、それを見極めることは難しい。どうすればこうした記憶を追い払うことができるのか、何が解決策で、何が答えなのか、わからないままで長い時間が過ぎていく。結局、私たちは、こうした記憶をめぐって自らを痛めつけ、それを他人の目から隠そうとし、そのことにまた苦しめられるのだ。その上、これを克服するための手段が示されたマニュアルは存在しない。そのため私たちは、こうしたできごとの理由と解決策が身近にあるとは思えない。悲しいことだが、多くの人が、心の内の記憶に囚われて、簡単には逃れることのできない、恥や、罪の意識、トラウマ、動揺、ストレスに悩んでいる。解決策は、教育（学校教育に限らず、社会教育全般）、それも人間に対する深い理解と考察に基づいた教育にあるかもしれない。さらに、構造的暴力や典型的な偏見による考え方といったものを克服するために、広い視野を持った別の哲学と認識が必要とされている。《教科書（チョルスとヨンヒ）》という作品のイメージは全て、私たちが韓国人として、そして人間として、これまで苦しんできた、そして今も苦しみ、今後も苦しむであろう災厄のコレクションなのである。そして、これらのイメージは、この一連の災厄を克服しようとしてきた過去から現在までの韓国社会に関する私的な分析でもある。結局、これらのイメージは、社会への反撃を声高に叫ぶことに対する代替案なのである。

隠された現実と、教科書に満ちている理想—教育における指導とは何なのだろうか？

「教科書」は、韓国という国家と教育システムの様々な側面を示している。まず、私たちが教育の中で、どれほど多くのものを失い、忘れてきたのか、という点だ。人間や素質への深い理解のない教育は、様々なかたちで個人に影響する。生涯にわたってトラウマとなるほどの心理的な傷を与えかねないのだ。私たちは、本能—暴力、恐怖、孤独、性、悩み、妄想のようなものを、どうやってコントロールすればいいのか、ということを読んでこなかった。

子どもの頃のこの類の思い出から、私は、小説『蠅の王』（ウィリアム・ゴールディング著）を連想することがある。私たちはそれが何なのかも知らず、それをコントロールする方法も知らなかった。しかも、教科書にあるような啓蒙的イメージや宣伝的なイメージは、現実の生活を偽り、社会の暗い側面を、そのイメージの向こうに隠してしまうのである。私たちは、自分というものを、社会が理想とする枠組みの中へ押し込んで、教科書を、まるで聖書のように崇めてきた。特に、韓国における、大学入試のための過剰な詰め込み教育では、子どもたちのことをまるで歩く辞書のように扱ってきた。一体、教育の最たる目的とは何なのだろう。社会や人間の理想のためなのか？ 私たちは、思考力や想像力から柔軟性や自由を奪われ、韓国国家の理想という価値としての人間の殻を与えられてきただけだ。それは人びとに心理的な悪影響を引き起こす。

国民的トラウマから個人のトラウマへの移行

教科書の中には、知られざる韓国の環境の問題がある。日本の植民地時代、朝鮮戦争、国家の南北分断、軍事独裁政権のようなトラウマあるいは複雑さとしての、痛みにも満ちた歴史的経験をしてきた。この種の歴史的なトラウマは、集団意識として、急速な経済成長や、都市環境の無秩序な開発、西洋文化への憧れ、過度な受験戦争を引き起こした。その結果、富裕層と貧困層の間には大きな格差が出現し、そして、韓国の伝統からかけ離れた環境が生まれた。私たちは生活し、遊び、韓国の歴史上のトラウマの寓話集を示すことができる種類の環境に傷つき、それを記憶に留めてきた。そしてそれは、幼い頃の記憶によって、韓国のトラウマが、個人のトラウマに、どのように作用したかを明らかにする。

西洋文化の侵入と遮断、あるいは韓国伝統の再評価

私たちが集団意識として、急速な発展に集中していた間に、韓国文化はアメリカや日本の巨大な文化資本主義の侵入を受けていた。スーパーヒーローや、ハリウッド・ムービー、日本の成人マンガ、テレビゲーム、大規模なスポーツブランド（ナイキやリーボック）、NBA、WWFプロレスからバービー人形まで、これらのものは私たちの目にとっても刺激的に映り、80年代の長い時間をかけて、韓国文化に溶け込んでいった。西洋文化への憧れか

ら、韓国にも西洋式の考え方が広がり、西洋式生活の大いなる幻想をわが韓国的生活に持ち込んだ。しかしそれは、西洋と異なる韓国の環境や伝統（習慣や価値観）とは相反するものだった。他国の個人的な文化植民地となることは、特に子どもたちに対しては、たくさんの副作用をもたらした。子どもの頃の記憶に関する、それぞれの印象の中には、韓国の文化的な局面を読み取ることのできるさまざまな寓話が含まれている。たとえば、私たちが隠そうとしてきた性は、子どもたちにとって、西洋や日本の低俗なポルノグラフィによって、とても深刻な、ゆがんだエロティシズムになった。

これらの内容は、私が、私自身をはじめ仁川（産業地帯で、韓国で二番目に大きな港湾都市）に住んでいた、韓国の若者たちの記憶から解読（デコード）したものである。

顔と肖像をめぐる問題

顔とは、胴体に植え付けられたダイアグラム（図形）なのだと私は確信する、私の作品《Bare exposure》で示したように。個々人の顔の効果を打ち消すために、私たちは、韓国の教科書の典型的な登場人物、チョルスとヨンヒのマスクを被った。さらに、マスクには、ある表情をつけた。この表情は、痛み（死）の瞬間のようにも見えるし、あるいは、絶頂の瞬間にも似ている。それは《Bare exposure》にも、カラヴァッジョの絵のようなルネサンス絵画にも見られるものだ。作品は、同じマスクの同じ表情を使っているのだが、異なった場面やカメラ位置によって、違うものになってしまう。私たちはそこに様々な感情を見出すことになる。このことは、顔、表情、身体、肖像をめぐるさまざまな問題を私たちに提起するのである。

体験を明らかにして、制作を通して心の傷を癒すことはできるのだろうか？

個人的な恥ずかしい体験を告白することで、人びとはある種の安心感を得る。では、視覚的で本能的な、幼少期の奇怪な記憶を、作品にすることによって、その個人的な傷を癒すことはできるのだろうか？ また、似たような経験を持つ鑑賞者に、安心感を与えることはできるだろうか？ イメージによって鑑賞者と共有された体験、あるいは鑑賞者に明らかにされた体験の有用性について、私はあれこれ思いを巡らせている。